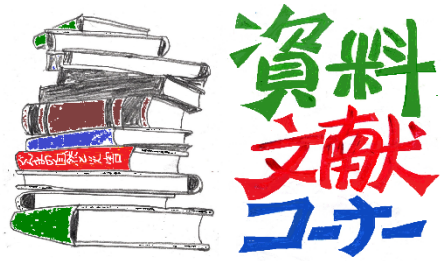


県内の地学者が協力して上毛新聞社から「ぐんまの自然と災害」を出版しました

山岸勝治（元高校教師）

令和元年 10 月の台風 19 号は、静岡県の伊豆半島に上陸し、中心の北側に豪雨を降らせ、宮城県沖に抜けて行きました。この台風の豪雨で、吾妻郡嬬恋村では国道の橋が流され、富岡市で土砂崩れが人家を襲い、平野部では川が氾濫し農地や家屋の浸水被害が甚大でした。

前橋市や高崎市の中心市街地がある前橋台地は、今から 2 万 4 千年前の古い浅間山の大規模な山体崩壊がきっかけで発生した巨大な土石流が、吾妻川を下り、利根川に流入して、当時あった広大な古前橋扇状地に流れ込んで、前橋市、高崎市、伊勢崎市、玉村町などの一帯を覆い尽くした堆積物です。前橋の岩神飛石や高崎の聖石、伊勢崎の竜宮などの巨大な岩塊は、その流れに流されてきたものです。似たような経路で土砂や岩塊を運んできたのが、表紙絵にある江戸時代天明 3 年の浅間山噴火です。その時運ばれた噴出物の破片の岩塊は、太田市世良田町では触れると紙に火がつく「火石」の状態だったと言いますから、その移動速度がいかに速かったかと想像がつきます。

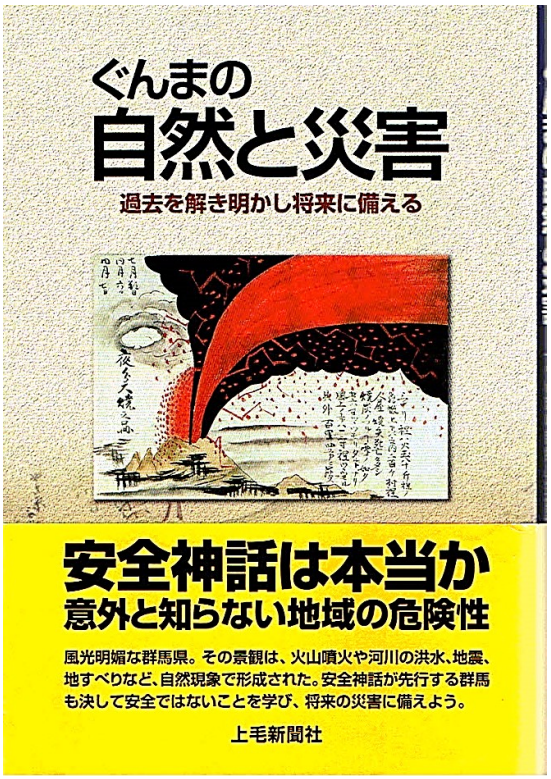
榛名山麓で発掘された渋川市の金井東裏遺跡からは、鎧を着た古墳時代の人骨が発見されて話題となりました。これは 1500 年ほど前の榛名山の巨大噴火で発生した幾度かの火砕流で集落が覆い尽くされた遺跡で、黒井峯遺跡や、中筋遺跡、白井遺跡も同時代の遺跡です。

赤城山南麓の前橋市や伊勢崎市には小高い「流れ山」が多くあります。これらは、約 20 万年前に赤城山が山体崩壊したなごりで、人類がまだ居住していない時期なので災害に含めませんでしたが、今なら大惨事です。赤城山南麓では、平安時代の弘仁 9 年（818 年）に起きた巨大地震で発生した土石流に襲われた住居址が多数発掘されています。2018 年 6 月には渋川市赤城町で最大震度 5 弱を記録した地震が起きています。こうしたことから推測すると、群馬県を震源とする被害地震が無いとは言い切れません。

最近は、日本のみならず世界各地で異常気象や巨大地震、あるいは火山噴火が起こっています。気候変動も災害の原因から除外できません。

地域には過去の災害の履歴があります。昔の人が石に刻んで残した遺跡を訪ねたり、災害の記録を調べたりして対策を立てることができます。それでも歯が立たない事態が来たら、「命あっての物種」と言いますから「逃げるが勝ち」です。

本書を読み、お住まいの地域の特性を理解し、災害への対策をご自分で立てる手がかりにしていただけると幸いです。



なお、本書の企画と執筆にあたった地学団体研究会前橋支部は、地質学の研究者、学校の教師や地学愛好家の集まりで、野外に出て群馬の自然の生い立ちを研究してきました。これらの成果は、研究論文として公表し、書店に並ぶ普及書として出版してきました。